

「世俗劇」としての『リア王』

山田幹郎

〔序〕

シェイクスピアの『リア王』の解釈上の主要な問題の1つは「苦悶して動く人体の」⁽¹⁾ イメッジが充満している「頑な浮世」(5幕3場314行)⁽²⁾においてリアが経験する痛々しい悲劇的苦難の問題である。リアの苦難が『リア王』の中心に置かれている⁽³⁾との考えは恐らく妥当なものであり、この問題の解決は、それに伴う多くの他の問題にも光明を投ずることは確かであろう。

この問題の解決に当たり、多くの批評家が『リア王』批評史という長い歴史の流れの中で貢献してきた。そしてリアの苦難を中心にして『リア王』のキリスト教的解釈は徐々に、そして1940年代に急速に、発展していき、1960年にデューシイ教授の論文が新ケンブリッジ版『リア王』の序論としてのせられた時には、この解釈法は確立してしまった観を呈している。こうしたキリスト教的解釈に対しては、当然の事ながら、反論が生まれ、ジェイムズ(1951年)⁽⁴⁾等がその口火の一端を切り、以後『リア王』はキリスト教劇か、或いは世俗劇かの論争が絶えない様である⁽⁵⁾。

この拙稿においては、我々はその論争の焦点をリアの苦難に合せつつ、限られたスペースの中で、〔I〕 リアの苦難を神の正義を例証するものと見、彼の性格上の変化をキリスト教の贖罪として神の慈愛を例証するものと見るキリスト教的解釈の成立の系譜を『リア王』批評史を概観する中で辿り、次に〔II〕 デューシイ教授の論文を主要な対象としつつ、解釈上の問題点を5つに絞り、

(i) コーディーリアをキリストの如く見て寓意的に解釈することの妥当性, (ii) ケントをキリストの如き性質を持つ者と解釈することの妥当性, (iii) 悪人達の死とキリスト教の神の正義との関連づけの妥当性, (iv) リアやグロスターの個人的欠点と神の正義との関連づけの妥当性, (v) リアの性格上の変化と神の慈愛との関連づけの妥当性を検討し, 20世紀の『リア王』解釈の父ともいるべきブラッドレイらに多くを負いつつ, 「結論」として『リア王』は「キリスト教劇」というよりは, 寧ろ「世俗劇」の範疇の中で論じられた方が妥当の様に思われるとするものである。

〔I〕

『リア王』に直接言及した批評文献は, 1681年のテイトの改作劇とそれにつけられた献辞以前には無い様である。そしてテイトから1765年のジョンソンに到る『リア王』論は, 結局, キリスト教と機械的合理主義に帰因するものと思われる「詩的正義」の故に『リア王』の筋を非難する事であった様である。

テイトはリアを復位させ, コーディーリアを恋愛結婚させ, 彼女の恋人エドガーに「真理と美徳は最後に成功するのだ」⁽⁶⁾と言わせ, デニス(1711年)はコーディーリアとケントとリアが死ぬのは「詩的正義の正確な分配」を欠き, 「神の摂理の支配に疑いを起す」⁽⁷⁾ ものとして非難し, ティバルド(1715年)は劇中の不合理や誤りを指摘したと言われ⁽⁸⁾, レノックス(1754年)は結末の諸事件が「蓋然的でも必然的でも正当でもない」⁽⁹⁾と述べ, ジョンソンは不幸な結末を「人生の一般的事件を正しく描写したもの」として是認しつつも「理性ある人間は皆正義を愛するのが自然」⁽¹⁰⁾という理由からテイトを弁護したのである。

この様な裁断的批評は前代のアディソン(1711年)の批判や⁽¹¹⁾, 順に広まる感情⁽¹²⁾や個々人への興味⁽¹³⁾等の中で消えて行き, 18世紀中頃から性格批評が主にされる事となり, 『リア王』批評ではウォートン(1753, 4年)がその創始者の一人となった。彼は一部裁断批評と誤解を免れなかったものの⁽¹⁴⁾, 「リアの精神錯乱の起源と発展を描写する」際のシェイクスピアの判断力と技

法を分析し、又、厳しい反省や他人の不幸への同情を生む逆境における性格発展の跡をも辿り⁽¹⁵⁾、リチャードソン（1784年）⁽¹⁶⁾と共に、『リア王』解釈の方向づけに貢献し、それは次代の浪漫主義期のコウルリジ⁽¹⁷⁾、ラム⁽¹⁸⁾、ハズリット⁽¹⁹⁾らに継承され、これらの人々は因果関係や逆境の効果より寧ろリアの情熱と苦難、劇の哀感、詩情、強烈さに注目したものの、性格への興味を失う事はなかったのであり、ブラックウッズ・マガジーン誌上の匿名の批評家（1819年）⁽²⁰⁾やハラム（1837年）⁽²¹⁾の批評も逆境の生む効果に注目する事を忘れなかったのである。

19世紀前半に於るドイツの3人の批評家が『リア王』のキリスト教的解釈成立の過程で言及されよう。シュレーゲル（1808年）は、神の摂理の「信仰が全面的に確立される為には地上の暗黒の巡礼以上の広い範囲を必要とすることを示す」⁽²²⁾為に詩人は不幸な結末にしたのだと述べて劇の宗教性への関心を高めた故に、ヘーゲルとウルリチ（1839年）は、悲劇中の性格と行為の厳しい応報的連関性の概念と苦難を通しての浄化という主題を説いて、後の批評家が神の正義と慈愛を説く遠因をなした故にである。ヘーゲルはリアやグロスターが狂人や盲人になる事により価値観を変える所に注目し⁽²³⁾、これをウルリチが苦難を通しての純化という主題へ持って行き、「劇的行為の対象と目的は此矛盾〔リアの愛情が持つ矛盾〕を解決すること、老人の愛をそれ自身と和解させること、父として王として純化し、元の理想的な形に回復することだ」⁽²⁴⁾と述べ、コウルリジ⁽²⁵⁾同様にコーディーリアの性格にも欠点を見、彼女も「内的な進展、純化の行程を」⁽²⁴⁾経るとした。此處に『リア王』の主題は著しく明白に方向付けられたのである。

19世紀中葉から1904年以前の『リア王』批評には、此の主題と共に道徳的或いはキリスト教的価値存在への言及がなされることが多い様である。ハドソン（1848年）は彼の情熱的な道化観から「当劇で苦心して仕上げられている様な美德と善についての詩人の考えは全くキリスト教の型のものであり、実際キリスト教の理想が持つ効能が浸み込んでいる」⁽²⁶⁾としてその理想の諸要素を明らか

にし、『リア王』のキリスト教的見方に先鞭を著けた者の一人となった。次のダウデン（1875年）は「純化の厳しい試練」の指摘と共に「劇の主要人物が、各自、人生を支配し、人間の運命を司るあの神秘的な支配力の存在を意識するようになる」と述べ、シェイクスピアが異教の時代に物語をすえた理由の一部は『『神々とは何か』』という問いを大胆にしうるようにならん』が為であると推測し、劇中の神々への言及に約4ページをさいた点で重要な人である。ダウデンは劇の倫理をキリスト教ではなくて「克己主義の倫理」とみ、この倫理も劇の主要な機能ではないとしたが⁽²⁷⁾、彼の『神々とは何か』』という問いの提出は、多かれ少なかれ後の多くの批評家の関心を規定し、彼等はその解答をキリスト教の正義と慈愛の神の中に、又、一部の人々⁽²⁸⁾は不正で無情な神（々）の中に見出して行った様である。1960年のデューシィ氏に到るキリスト教的解釈確立の系譜は前者の流れを辿っていくものである。次のテン・プリンク（1895年）は、後にキリスト教の枠内で論じられる事となる忍耐を強調した点で言及されよう。彼は劇中の自己犠牲的能動的愛を賞讃すると共に奇跡を「不幸の中で人間の不屈さは最もよく発展させられ、美德は美しい百合の如く世の堕落のふちから生ずる」所に見、詩人の説くものは「諦念せる忍耐、男らしい不動さ、不撓不屈の道徳的行為の義務」⁽²⁹⁾であると述べて劇の楽天主義を強調したのである。

こうして『リア王』批評史を瞥見していくと、ブラッドレイ（1904年）の『リア王』論は、前世紀までに積重ねられた業績により広く深い学識と省察が施されたものである事が分る。彼の観点は微妙で、結局は世俗劇の範疇で劇をみた事は後に引用するように明らかな事実であるが⁽³⁰⁾、彼は神々とリアの苦難を通しての純化とを関連づけて論じた故に、後の批評家達が『リア王』を世俗劇からキリスト教劇の範疇に移し変えうる因を作った事も否めない事実である。ブラッドレイは克己と忍耐を実行しようとするリアの自制、末娘への不正に対する彼の後悔、道化や逆境の中に住む貧民への同情や祈り、追従の虚偽と権威の残忍さと共に通の人間性と「如何に権力と地位と世の中の全てのものが愛を除いては虚しいものか」を見知るリアの性格上の変化に注目した後に、「もし

この詩を『リア王の贖罪』と呼び、彼に対する「神々」の仕事は彼を苦しめることでもなく、彼に「高貴な怒り」を教えることでもなくて、一見望みのない失敗と見えるものを通してまさに人生の窮屈の目的に達せさせることであると言明するならば、我々は少くとも真理の近くにいるのではなかろうか」と提案して概説し、5幕3場初めのリアの清朗な諦観に「神々自身が香を投ずる」と評し、オールバニの「神々が彼女を守り給わんことを！」（5幕3場255行）と次の卜書「リア、コーディーリアの死体を両腕に抱いて登場」との皮肉な並置の中に劇の「モラル」を見て「神々が香を投ずるのは」権力と繁栄の断念に対してだと述べた。そしてリアの過度の苦難の問題も、リアはコーディーリアが生きていると錯覚して「耐えられぬ歎喜」⁽³¹⁾ の中で死ぬ以上、「あれは生きておる！もしそうなら／それは私が今まで味おうた悲しみを／皆償うてくれる機会だ」（同場265行）は成就される故、解決されると暗示した。

20世紀の『リア王』のキリスト教的解釈は、結局は世俗劇の中で見ざるを得ず、その故にもビゼルの非難⁽³²⁾ を受けることとなるブラッドレイ説をキリスト教劇の枠に移して、その中で劇の世界と人物を見ることだった様に思われる。さて今世紀におけるキリスト教的解釈の成立にとってメイスフィールド（1911年）⁽³³⁾、シェッキング（22年）⁽³⁴⁾、グランヴィル・バーカー（27年）⁽³⁵⁾、ナイト（30年）⁽³⁶⁾、ウイルソン（37年）⁽³⁷⁾といった批評家（特にナイト等）が貢献している事は当然だが、ここでは同解釈の発展⁽³⁸⁾ と確立に大きな役割を果したと思われる人々のみを上げてみれば、まずノウブル（1935年）⁽³⁹⁾ が注目される様である。彼の著書は新アーデン版や新ケンブリッジ版等によく参照されており、『リア王』の17箇所にわたり新、旧約聖書、旧約の外書「ソロモンの知恵」、教義問答書に言及し、シェイクスピアが劇作成に当り意識的無意識的に導入したキリスト教に光を当て『リア王』のキリスト教的解釈を援助する役割を果したことは容易に推定される所である。次にウエルズフォード（1935年）が注目されよう。彼女は道化を歴史的にキリスト教的伝統の中に枠づけし、真理を見る賢い道化とし、「だが私は残る、道化は残る。／利巧な奴

は逃げるがよい。／逃げる家来も馬鹿ではあるが／道化は決して無賴の徒じやないよ」(2幕4場82行)の台詞に「真理を見る狂人の紛うことなき知恵」を見、リアの悲劇は「道化に冠を被せ、神として祭ることだ」⁽⁴⁰⁾とし、愚かさと潔白さ、狂気と真の理性の同一視について大きな影響を及ぼすこととなつた。次にビゼル(1944年)のコーディーリア論が注目されよう。彼は劇の異教的雰囲気が如何に注意深くなされているか示した後でコーディーリアだけは始終神学的な術語とキリスト教的象徴と結びつけられ、劇中キリストと比較関係づけられていることを示し、彼女は「リアが盲目の高慢の中で拒否した善」であり、「リアの浄化の闘いの終着点を象徴する」キリスト教的な、「否、実の所キリストの如き」⁽⁴¹⁾人物だとしたのである。こうしたコーディーリア論は、既に彼女と愛との勝利を語って劇の宗教的解釈をしたチャインバーズ(1940年)⁽⁴²⁾にも暗示されているものだが、ビゼルを受けてビッカースュテス(46年)は「許された罪と報われた愛と澄んだ洞察力と歓喜に満ちた歌との生活」⁽⁴³⁾の中に伝統的な天国が地上に移された姿を見、キャンベル(48年)はコーディーリアの無私の「キリスト教的愛がもつ癒着力」⁽⁴⁴⁾が果す淨罪について論じ、次に、このビゼル論はダンビイ(49年)によって強化されるに到った。ダンビイのキリスト教的『リア王』観は、次の箇所に要約される：

私にとっては、確かに『リア王』の異常なまでの洞察は宗教的な洞察とほとんど区別出来ないものである。それは我々が持つ最も深遠な悲劇であるばかりではない。それは、又、人間の世界と社会に対する本質的にキリスト教的な解説の最も深遠な表現であり、それはキリスト教の伝統的な用語を用い、その伝統を明確に述べることに依り利益を受けている。『リア王』は少くとも『神曲』と同じくらいキリスト教的なものだと私は感じる……その贈物は柔軟と同情と真理であり、忍耐と愛である。

そして『リア王』を「自然」という言葉が持つ諸意味を劇化したキリスト教的寓意劇と見るダンビイにとってコーディーリアはペイコンやフッカーの慈悲深い自然の象徴物であり、「グリセルデやベアトリーチェに匹敵する人物で、文

字通りには一人の女，寓意的には個人と社会の健全さの根源，比喩的には「長く苦しみ，しかも親切な」キリスト教の愛，神秘的には頗りの原理そのもの」⁽⁴⁵⁾となり，彼女の寓意的解釈のテクスト上の根拠は4幕6場208行‘twain’をアダムとイヴに読むこと求められた。この読み方が劇のキリスト教的解釈の重要な点の1つである事は明白で，ジーゲル（57年）も「コーディーリアと，アダムとイヴによって人類にもたらされた呪いからそれを贖ったキリストとの類似は，彼女の紳士のコーラス的な短評により，露骨にはっきりと述べられてはいないものの，間違いようのないものとされている」⁽⁴⁶⁾として，彼女を通してリアはキリスト教的救済を与えられると論じたのである。『リア王』のキリスト教的解釈の系譜上では，次に，劇中のイメージと構造の関係を検討し，多くのパラドックスを指摘しつつ，結論の前章の題を「神々は正しい」としたハイルマン（48年）の著書が注目されよう。彼も「悲劇中の苦難は目的ではなくて，産物であり手段である」としてリアの贖罪を中心としつつ，量的な損失が質的な利益であることを繰返し強調し，前掲章では，逆境の生む浄化的効果と悪人の敗北の中に，劇中の社会に宗教的な力が働いている証拠を見，神々は正しいとし，永遠の法と正義，人間の忠誠を要求する不变的実在の王国への忠誠を通して人間はその人間性を成就し，現世の人間の運命がどうであれ，この成就こそ窮屈的なものであり，劇中の異教の世界の持つ諸価値はキリスト教的価値の転移を受けており，最終場面の始めのリアの二つの台詞は「キリスト教的感情によって浸透されている」⁽⁴⁷⁾と論じた。そしてこのハイルマンの「神々は正しい」という章名は，シェイクスピア劇のキリスト教的解釈者リブナー（58年）⁽⁴⁸⁾によって論文題目とされて継承されたのである。

かく40年代に著しく発展した『リア王』解釈は，1950年にマックスウェルによって「『リア王』は異教の世界に関するキリスト教劇だ」⁽⁴⁹⁾との断定を与えられ，次にミュア（52年）が新アーデン版『リア王』の序論でリアの贖罪を語り，マックスウェルの言葉を「正しい」として認め，劇中の神々については微妙な立場を取りながらも「神々は正しい」（5幕3場170行）という台詞はグロ

スターの叫び（4幕1場36行）に対する「劇的な答え」⁽⁵⁰⁾と註して、劇の世界を支配する神々の存在を暗示したのである。そして『リア王』のキリスト教的解釈はジーゲルやリブナー等を経て、1960年のデューシイ氏の論文へ辿りつく時、同解釈は確立してしまったとの観を呈してくる。事実、キリスト教的解釈成立の系譜を、誠に不十分ながら暫見しく来ると、デューシイ氏のキリスト教的解釈は、従来の批評家達の業績を集約した、全く無駄のないものであることは、彼の要旨を次に示せば明らかとなるであろう：「（要旨）シェイクスピアの観点は「キリスト教」のものであり、マックスウェルが正しくも述べた様に『リア王』は「キリスト教劇」である。悪人は皆劇の結末以前に死んでしまうが、これはオールバニの口を通して語られているが、神が絶対的な悪人に對し正義を下したのであり、神はコーンウォルやゴネリルやリーガンの様な者達を破滅させるのであって、神は「正しい」のである。又、神は罪を犯すが更生しうる者達を懲しめる。リアは最初愚かで虚栄と軽率の欠点を持ち、キリスト教が大事にしている真理と知恵を拒絶するという罪を犯す、道徳的精神的に盲目な人物であり、彼の罪は理性を狂わせられるという受難を含めた諸々の受難によって神に懲しめられる。同様にグロスターも最初道徳的精神的に盲目であり、姦淫を既に犯しており、彼の罪は両眼を盲にされるという受難を含めた諸々の受難によって神に懲しめられる。神は「正しい」のである。さて『リア王』の世界には「アダムとイヴの如く」ゴネリルとリーガンがその罪によって人間性を總て呪いの下にもたらしたが、キリストの如くそれを救済する「キリストの如き贖い主」コーディーリアがいる。彼女を通じ、又、無私無欲に仕える故に「キリストの如き性質を持つ」ケントと賢い道化によってリアは教えられ救われていき、そして受難によって本質的に感情を伴うキリスト教の忍耐や共通の人間性の意識やキリスト教の知恵を学び、かくしてリアが改宗し、精神的な再生をして罪からの救いに到達出来、又、グロスターも受難を通して知恵を学び、精神的な罪の救いを成就するが、これらは神が「慈悲深い」からである。だが神は、又、神秘的な仕方で動き、この世のコーディーリアの様な者達を不

可思議に取扱う。彼の方法は測り知れないのである。『リア王』は決して悲観主義的なものではなく、悲観主義を逆転した「キリスト教劇」なのである。」⁽⁵¹⁾

以上、我々は『リア王』の中心に置かれていると思われる苦難の問題に重点を置きつつ、歴代の批評家達が、どの様にして、その苦難のキリスト教的解釈を成立させ、そしてダウデンの「神々とは何か」の問い合わせが解決されて、神々が「正しいと同時に慈悲深い」⁽⁵¹⁾ 神となったのかの系譜の概観（瞥見と述べた方が遙かに妥当であろうが）を試みてきた。

次に我々はデューシィ教授の論文を中心として、このキリスト教的解釈の問題点を指摘しなければならない。

〔II〕

(i) コーディーリアをキリストの如く見て寓意的に解釈することの妥当性。この点の解釈上の主要な分岐点は(1)4幕6場208行‘twain’をアダムといふと、又は彼らとの連想で読むべきか否か、(2)1幕1場87行‘Nothing’の返事の中にコーディーリアの性格上の欠点を読まぬべきか否か、にある様に思われる。(1)の否定的解答の妥当性は、①ファーネスの集註版に何ら脚註がなく、プラッドレイやナイト達もその様に考えた形跡なく、劇のキリスト教的解釈が盛んとなった1940年代に最も重要な点の1つになった事、②この寓意的解釈は「尤もらしいが確かな読み方ではない」⁽⁵²⁾ とするシウェルや、ダンビイは「気紛れに」⁽⁵³⁾ 暗示していると註するミュア（マックスウェルの考えを「正しい」とした人！）達によって拒否されている事、③紳士が彼の住む世界の中心的事件たるリアの苦難を宗教的には見ずに入間主義的に見ていることは、‘twain’のすぐ前にある「一番卑しくみじめな者にしても誠に哀れな光景、/王様であってみれば何とも申し様がない！」(205行)という台詞から知られる事、等によって裏付けられる様である。(2)のコーディーリアに性格上の欠点有りとする考え方の妥当性は、①テイト、コウルリジ、ウルリチ、プラッドレイ、スウィンバーン、グランヴィル・バーカー、ナイト、スペンサー、ミュ

ア、シウェル、ブルック等⁽⁵⁴⁾ が彼女の性格に欠点を認めている事、②劇中のコーディーリアが豊かに人間的に動き、「何もございません」と繰返し、姉達に嫌悪の情を示して説喻し、愛情を父に半分、夫に半分と数量的に割切って質的な愛の真実を歪めている等は、彼女の性格上の欠点のあらわれと取れる事、③「親切な神々」(4幕7場14行)への祈願はあっても奇妙な事に感謝の祈りが存在しない事⁽⁵⁵⁾、④彼女のブリテン侵入の動機は信仰からではなくて「ただ愛、心からの愛とお年を召したお父様の権利だけ」(4幕4場28行)からであって世俗的なものとされる事⁽⁵⁶⁾ 等によって裏付けられる様である。かくてコーディーリアは寓意的には考えられていないと思われてくる。

(ii) ケントをキリストの如き性質を持つ者と解釈することの妥当性。この非妥当性は、(1)ケントは「神学的と呼びうる信仰によって激励されることも支えられることもない」⁽⁵⁷⁾ 人とダウデンに言われ、「彼は「最も正しい神々」に対するエドガーの不斷の信仰を持ちあわせていない」⁽⁵⁸⁾ とブラッドレイに言われている事、(2)テクストにおいてケントの忠誠の動機は宗教的というよりは寧ろリアへの尊敬心や愛情(1幕1場140—1行、157行参照)であり、追放後の奉公の動機も結局そうした内的愛と、リアに「よく働いてくれたと知って」もらう(1幕4場7行)為と思われる事、(3)モーバーリィ(1876年)やマーチャント(1964年)⁽⁵⁹⁾ らが指摘している様に、キリストの如き性質を持つべきケントが劇中最後の台詞(5幕3場321行)で克己主義的な自殺を考えているらしい事、等によって裏付けられる様に思われる。

(iii) 悪人達の死とキリスト教の神の正義との関連づけの妥当性。この非妥当性は、(1)成程、コーンウォル、エドマンド、姉娘二人の敗北と死は劇中で神々の応報的正義と結びつけられているが⁽⁶⁰⁾、この様な関連づけは異教の世界にも当然見られ⁽⁶¹⁾、『リア王』の世界は異教の世界である以上、正義の神々への言及はその世界の一つの蓋然的な適切な宗教的見方として把握される事、(2)悪人の破滅と神々の正義を関連づけるのはエドガーとオールパニにほとんど限られる事は、それが両人の「性格」と「直接的状況」⁽⁶²⁾ に適った蓋然的言及

と取り得る事，(3) ①敬虔なオールパニにとってさえ， エドマンドの死は「この際些々たる事にすぎない」(5幕3場295行) であり，又，悪人の死のもつ宗教的意義はリアやケント等の主要な関心とはなっていない事，②コーディーリアを絞殺した奴隸については神学的な言及が全く存在しない事，③地獄へ落ちたであろう悪人の来世への言及が無い事，(4)悪人の死は（善人の死同様に）神秘性を多分に含んではいるが，又，誠に自然な道徳的事実としても把握され，「シェイクスピアは悪を超自然的に否定するのではなくて， 人間の美德と自己犠牲の愛を存在させることによって， 悪の存在と影響に反対している」⁽⁶³⁾ とのダウデンの言葉や，次のブラッドレイ説が妥当と思われる事，等によって裏付けられる様に思われる：

私は『リア王』が公正な万能力や天上の調和の啓示や，神秘と正義の和解の約束さえも含んでいるというのではない……著者の側からする世界の如何なる神学的解釈も〔彼の諸悲劇から〕除外されており，そして，それらの効果は，公正な或いは不正な万能力の観念によっては等しく混乱させられたり破壊されたりするであろう。又，それらを読む時，我々は厳密な報償とか，我々の道徳観が要求すると言われるような功徳と繁栄の調整とかいう意味での「正義」や「公正」を考えないのである⁽⁶⁴⁾。

(iv) リアやグロスターの個人的欠点と神の正義との関連づけの妥当性。この非妥当性は，(1)劇中の人物の苦難は不正な超自然的存在者の結果するものでは決してなく，彼ら自身の過失や罪悪と密接に関連して言及されてはいるものの，エドガーの「神々は正しい」という台詞は，敬虔なエドガーの性格に一致し，グロスターの罪に対する明白な一審判ではあっても，リアやコーディーリアやコーンウォルの家来の死と神々の正義が劇中で結びつけられていない以上，彼の言葉を劇の支配的な言葉として取上げるのも困難な事，(2)リアとグロスターの不正な行為は彼ら自身の苦難を生む一因ではあるが，それは「純粹に自然な行程であって，誤って導かれた人間性を直す為の天上の顯現はない」⁽⁶⁵⁾と思われる事，(3)リアとグロスターの苦難は劇中決して受けいれられるべきも

のとして描かれていないことはグロスターの苦難に対するオールバニや家来達やエドガー（5幕3場204行参照）の反応や、リアの苦難に対するコーデニアリアや紳士やケント（「胸よ、張り裂けよ、どうか裂けてくれ！」（5幕3場312行））の反応から明白であり、デューシイ氏も「劇を一全体としてとらえるとグロスターは罪を犯す以上に犯されているのではないかと疑問に思わずにはいられない……リアがしなければならない様にグロスターも当然の報い以上に受難しなければならない」と述べ、リア達が「「偉大な神々」の怒りを受けるに値しない」⁽⁶⁶⁾ ことを明白ではないにしろ認めており、これは不正な神を考える因ともなる危険な考え方である故にも、リアの苦難は、神の正義と関連づけて論じないで、一全体としての悲劇の世界の有機的関係の中で一部はリアやグロスターや彼らの側の人々の性格上の欠点と過失が、大部分は彼らの周囲の邪悪な者達の罪悪がもたらすものと考えた方が妥当の様に思われる事、等から裏付けられ、次のブラッドレイの言葉で強固なものとされる様に思われる：

リアが実際受けたあれだけの苦悩を彼は当然受けるに値したと主張することは、言語を曲解するばかりか健康な道徳感をも侮辱するものである。なお又、それは、行為の諸結果が行為から「正しくも」生じて來ると我々に思われるものののみに限定出来ない悲劇的事実を被い隠すことでもある。そうであるから、我々が悲劇の世界の秩序を正しいと言う時、我々はその言葉を曖昧で説明ぬきの意味で用いているか、又は、この秩序について我々に示されていることを越えて信仰に訴えているかのどちらかである⁽⁶⁷⁾。

(v) リアの性格上の変化と神の慈愛との関連づけの妥当性。この非妥当性は、(1)キリスト教の倫理の諸価値は豊かに例証されはするものの、リアがあれ程の受難を受けながらもキリスト教に真に改宗したとすることは困難であって、これを追求して行くと、危険にも、無情な神を考える因ともなると考えられる事、何故ならば、最後の場面で①リアの「俺にお前達の舌と目があるなら、それを使って天の円天井を呪い割ってやるのに」（5幕3場258行）という台詞は真に改宗し得たキリスト教徒の吐く言葉とは取難いし、②死んだコー

ディーリアを前にしてリアは一度も永生に入ったコーディーリアの魂に言及せず、全然魂の不滅を感じていないし、③彼は「よく切れる偃月刀で奴等を跳ね廻らせた / 時もあったが、今は年もとり、 / この通りの苦労で駄目になってしまった」(276行)と述べ、自分の体験した苦労を肉体的衰弱と結びつけるだけで神の試練とは考えず、（それ故、あの老人の「この試練の中で神が私の信仰を試される」⁽⁶⁸⁾という台詞は期待されず）苦労が結果したであろうと予想された幸福な道徳的精神的見解も、彼岸の意識も志向性もなく、かくて「最終場面に直面すると淨罪的な罪滅し、精神的な純化の如何なる詳しい説明も唯氣力喪失して疼く見当違いの事」⁽⁶⁹⁾にすぎなくなるからである、次に(2)逆境の中で苦難する人々が余儀なくも知り行う忍耐、エドガーの「時が熟するのを待つのが總てです」(5幕2場11行)の台詞に中心的に表現された忍耐は、多分逆境における人間の態度の解答を暗示するものであり、又、感情を排除する克己主義の忍耐ではない（何故なら登場人物の「悲劇的事件への熱狂的参加」⁽⁷⁰⁾を如何にして克己主義の忍耐と考えられよう）であろうが、又、キリスト教の忍耐とも考えられない事、何故ならば、①「人が苦痛と死を高貴に忍耐することが彼の罪を償うと仮定する事は『神とキリストを否定し、彼の恩寵を冒瀆し、彼の福音を邪道に導く』ことで」⁽⁷¹⁾あり、②エドガーが説く忍耐も、オーウェル（1947年）も述べている様に「非キリスト教的な所感」であり、「人間主義的な」⁽⁷²⁾ものと思われ、「私だけなら、他に、嘘つきの運命の女神の渋面を睨み倒すことも出来ましようが」(5幕3場6行)というコーディーリアの忍耐も「神に対する信仰より寧ろ彼等自身が持つ内的な不屈の精神に頼っている」⁽⁷³⁾者達の忍耐に等しく、これも異教的、人間主義的、世俗的な態度と思われるからである、次に(3)劇の世界は異教の世界であり、その世界でも悩みを通して知恵が得られるという考えは、神によって「無情に授けられる贈物」⁽⁷⁴⁾として、アイスキュロス等によって豊かに例証され、この事は我々に『リア王』をキリスト教劇だと断定させる大きな障害と思われる事、等によって裏付けられる様に思われる。

以上、主要な5つの問題点の検討から『リア王』は「キリスト教劇」というよりは、寧ろ「世俗劇」と思われるとする我々の見解は、次のプラッドレイの考え方によって一層堅固に成立してくる様に思われる：

…この問〔=シェイクスピアの悲劇における絶対最高力とは何かという問〕が「宗教的な」言葉で答えられてはならないことは同意されるであろう。何故なら甲や乙の登場人物は神々とか神とか、悪魔とか魔王とか、天国とか地獄とかについて語り、又、詩人は他界から幽靈を我々に見せることはあっても、これらの概念は彼の人生表現に実質的に影響を及ぼしてはいないし、又、人生の悲劇の神秘に光明を投する為に用いられてもいないのである。エリザベス朝の劇は殆ど全く世俗的であった。そしてシェイクスピアは創作している間は、事実上彼の眼界を非神学的な観察と思想の世界に局限したのである。それ故、物語の時代がキリスト教以前のものにしろ、キリスト教のそれにしろ、実質的には同一不二の仕方でそれを描いている。彼はこの「世俗的な」世界を最も熱心に、又、眞面目に見、そして自己の意見を押しつけることを願わず、又、根本的には何人の希望も恐怖も信心も顧慮せず、徹底した忠実さでそれを描いていると結論せざるをえない⁽⁷⁵⁾のである。

〔結論〕

『リア王』は「キリスト教劇」というよりは、寧ろ世俗的な（異教の）世界を忠実に描写した「世俗劇」と考えられる様に思われる。テクスト上にあらわされているリアの受け入れがたい苦難と生れかわっていない彼の精神の諸相とは、論理的に追求されると、危険にも不正で無情な神の概念を生まざるをえないであろう。デューシィ教授の論文に示された様なキリスト教的解釈は、テクストを越えて正しくて慈悲深い神に対するキリスト教信仰に訴えることによって、リアの受け入れがたい苦難を受け入れ、又、リアの非更生的諸相を無視しようとする故に反論を受けざるをえない様に思われる。（1965年8月31日。）

〔註〕

(1) Caroline F.E.Spurgeon, "Leading Motives in the Imagery of Shakespeare's Tragedies," *Shakespeare Criticism 1919-1935*, sel. Anne Ridler (London,

- 1962), p. 47.
- (2) テクストは, Kenneth Muir, ed., *King Lear* (Methuen and Co. Ltd, 1961). 訳は自由な拙訳。
- (3) Kenneth Muir, "Introduction," *Ibid.*, p. xlvi.
- (4) D. G. James, *The Dream of Learning* (Oxford, 1951).
- (5) Cf. Ronald Berman, *A Reader's Guide to Shakespeare's Plays* (Scott, Foresman and Company, 1965), pp. 108-10.
- (6) Horace Howard Furness, ed., *King Lear* (Dover Publications, Inc., 1963), p. 477.
- (7) John Dennis, "On the Genius and Writings of Shakespeare," *Eighteenth Century Essays on Shakespeare*, ed. D. Nichol Smith (New York, 1962), p. 29.
- (8) Cf. D. Nichol Smith, "Introduction," *Ibid.*, p. xvii.
- (9) Charlotte Lennox, "Shakespear Illustrated" (Excerpt.), *The King Lear Perplex*, ed. Helmut Bonheim (Wadsworth Publishing Company, Inc., 1960), p. 11.
- (10) Bertrand H.Bronson, ed., *Samuel Johnson*: "Rasselias, Poems, and Selected Prose," (Holt, Rinehart and Winston, 1960), p. 297.
- (11) Cf. Gregory Smith, ed., *Addison & Steele and Others*: "The Spectator," Vol. II, (London, 1958), pp. 120-1; D. Nichol Smith, ed., *op. cit.*, p. 309.
- (12) Cf. Kenneth Muir, "Introduction," *Macbeth*, ed. Kenneth Muir (Methuen and Co. Ltd. London, 1963), p. xlvii; T. S. Eliot, "Shakespearian Criticism: I. From Dryden to Coleridge," *A Companion to Shakespeare Studies*, ed. H. Granville-Barker & G. B. Harrison (Cambridge, 1964), p. 290.
- (13) Cf. Thomas Middleton Raynor, "Introduction," *Samuel Taylor Coleridge: Shakespearean Criticism*, Vol. I, ed. Thomas Middleton Raynor (London, 1960), p. xviii.
- (14) Cf. Joseph Warton, "King Lear," *Shakespeare Criticism 1623-1840*, sel. D. Nichol Smith (London, 1961), p. 69; D. Nichol Smith, *op. cit.*, p. xix. リアの狂気の因についてのウォートンの考えに関しては, cf. Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, p. 412; D. Nichol Smith, sel., *op. cit.*, p. 120.
- (15) Joseph Warton, *op. cit.*, pp. 59-69.
- (16) Cf. D. Nichol Smith, *op. cit.*, p. xxxv.
- (17) Cf. Thomas Middleton Raynor ed., *op. cit.*

- (18) Cf. Charles Lamb, "On the Tragedies of Shakespeare, considered with reference to their fitness for Stage Representation," *Shakespeare Criticism 1623-1840*, pp. 204-5.
- (19) Cf. William Hazlitt, "Characters of Shakespear's Plays," *King Lear*, ed. Horace Howard Eurness, pp. 421-4.
- (20) Cf. *Ibid.*, pp. 425-6.
- (21) Cf. *Ibid.*, pp. 428-9. 尚、キーツの『リア王』観については、cf. Hyder Edward Rollins, ed., *The Letters of "John Keats" (1814-1821)*, Vol. I, (Harvard University Press, 1958), pp. 192, 195; D. G. James, "Keats and *King Lear*," *Shakespeare Survey*, ed. Allardyce Nicoll (Cambridge, 1960), pp. 58-68.
- (22) Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, p. 451.
- (23) Anne and Henry Paolucci, ed., *Hegel on Tragedy* (A Doubleday Anchor Original, 1962), p. 88.
- (24) Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, pp. 455, 456.
- (25) Thomas Middleton Raynor, ed., *op. cit.*, p. 54.
- (26) Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, p. 437.
- (27) Edward Dowden, *Shakespeare: A Critical Study of His Mind and Art* (London, 17th Ed.), pp. 263, 269 (cf. 269-72), 259.
- (28) Ex. Algernon Charles Swinburne, *A Study of Shakespeare* (1876), pp. 171-2, quot. A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London, 1960), pp. 227-8; T. S. Eliot, "Shakespeare and the Stoicism of Seneca," *Shakespeare Criticism 1919-1935*, sel. Anne Ridler (London, 1962), pp. 221-2; Bonamy Dobrée, "Thomas Hardy," *English Critical Essays: "Twentieth Century"*, sel. Phyllis M. Jones (Oxford University Press, 1956), pp. 328, 334; Harley Granville-Barker, "King Lear," *Prefaces to Shakespeare* (B. T. Batsford Ltd. London, 1963), p. 44; Theodore Spencer, *Shakespeare and the Nature of Man* (The Macmillan Co., 1961), p. 148; Edward A. Armstrong, *Shakespeare's Imagination* (University of Nebraska Press, 1963), p. 73; G. B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies* (Routledge & Kegan Paul, 1961), p. 159; William Empson, *The Structure of Complex Words* (Chatto & Windus, 1952), p. 196; Nicholas Brooke, *Shakespeare: King Lear* (Edward Arnold, 1963) p. 39, etc.
- (29) Bernhard ten Brink, "Five Lectures on Shakespeare" (Excerpt.), *The King Lear Perplex*, p. 42.

- (30) Cf. Notes (64), (67), (75).
- (31) A. C. Bradley, *op. cit.*, pp. 235, 240, 272, 241.
- (32) S. L. Bethell, *Shakespeare and the Popular Dramatic Tradition* (Staples Press, 1944), p. 54.
- (33) John Masefield, "William Shakespeare" (1911), (Excerpt.), *The King Lear Perplex*, pp. 60-1 and A. W. Verity, "Introduction," *King Lear*, ed. A. W. Verity (Cambridge, 1957), pp. xliii-ix.
- (34) L. L. Schuking, "Direct Self-Explanation," *Shakespeare Criticism 1919-1935*, pp. 158-9.
- (35) Harley Granville-Barker, *op. cit.*
- (36) G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (Methuen: London, 1960), pp. 177-206.
- (37) J. Dover Wilson, *The Essential Shakespeare* (Cambridge, 1964), pp. 124-7.
- (38) 『リア王』のキリスト教的解釈発展の背後には文芸復興期を中世以来のキリスト教の伝統の中でとらえようとする学説が存在している様である。例えばブッシュ (1939年) のルネッサンス観については cf. Douglas Bush, *The Renaissance and English Humanism* (University of Toronto Press, 1962), p.34, etc. 又、シェイクスピア劇をキリスト教の伝統の中で解釈しようとする研究者にとって、次の論文は確かに有益なもののが1つとなるであろう: L. A. Cormican, "Medieval Idiom in Shakespeare," *Scrutiny*, Vol. XVII (1950 and 1951), pp. 186-202; 298-317.
- (39) Richmond Noble, *Shakespeare's Biblical Knowledge* (London, 1935), pp. 299-322.
- (40) Enid Welsford, *The Fool: His Social and Literary History* (London, 1935), pp. 256, 269. cf. Ronald Berman, *op. cit.*, pp. 110-1.
- (41) S. L. Bethell, *op. cit.*, p. 60.
- (42) R. W. Chambers, *King Lear* (Glasgow, 1940), pp. 49 ff.
- (43) Geoffrey L. Bickersteth, "The Golden World of 'King Lear,'" *Proceedings of the British Academy*, Vol. XXXII (1946), p. 154.
- (44) Oscar James Campbell, "The Salvation of Lear," (Excerpt.), *The King Lear Perplex*, p. 108.
- (45) John F. Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature* (Faber and Faber, 1949), pp. 204-5, 125. 尚、『リア王』と『神曲』については、cf. A. C. Bradley, *op. cit.*, pp. 225-30; T. S. Eliot, *loc. cit.*

- (46) Paul N. Siegel, *Shakespearean Tragedy and the Elizabethan Compromise* (New York, 1957), p. 186.
- (47) R. B. Heilman, *This Great Stage: Image and Structure in "King Lear,"* (Louisiana State University Press, 1948), pp. 32, 271.
- (48) Irving Ribner, "The Gods Are Just," *Tulane Drama Review*, Vol. II (1958), pp. 34-54.
- (49) J. C. Maxwell, "The Technique of Invocation in *Lear*," *Modern Language Review*, Vol. XLV (1950), p. 142.
- (50) Kenneth Muir, *op. cit.*, pp. lvi, 210 (=footnote to V. iii. 170).
- (51) George Ian Duthie, "Introduction," *King Lear*, ed. G. I. Duthie and J. Dover Wilson (Cambridge, 1962), pp. ix-lv, 252 (=N. to 4.6.203-5), li.
- (52) Arthur Sewell, *Character and Society in Shakespeare* (Oxford, 1951), p. 62.
- (53) Kenneth Muir, ed., *op. cit.*, IV. vi. 208 footnote.
- (54) Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, p.468; Thomas Middleton Raynor, ed., *op. cit.*, p. 54; Furness, ed., *op. cit.*, p. 456; A. C. Bradley, *op. cit.*, pp. 263-9; A. C. Swinburne, "Shakespeare" (Excerpt.), *The King Lear Perplex*, p. 58; Harley Granville-Barker, *op. cit.*, pp. 48-52; G. Wilson Knight, *op. cit.*, p. 198; Theodore Spencer, *op. cit.*, p. 141; Kenneth Muir, *op. cit.*, p. lviii; Arthur Sewell, *op. cit.*, pp. 60-3; Nicholas Brooke, *op. cit.*, p. 18.
- (55) Cf. Leir's blessing at Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, p. 400.
- (56) Cf. Kenneth Muir, *op. cit.*, p. li.
- (57) Edward Dowden, *op. cit.*, p. 271.
- (58) A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 258.
- (59) Horace Howard Furness, ed., *op. cit.*, V. iii. 322, 323, Footnote; W. Moelwyn Merchant, "Shakespeare's Theology," *A Review of English Literature*, ed. A. Norman Jeffares (Longmans, 1964), p. 77. ケント自殺説については、これを御助言下さった加藤さだ教授に感謝する。Cf. Sada Kato, "Shakespeare and Senecan Pride—The Philosophy of Self-Slaughter—," *Academia* (1963), p. 13. 尚、私のささやかな『リア王』研究を時間的に早め、その内容が一層貧弱なものとならなかった上で得た数多くの方々の御助力、なかんずく、同教授並びに加藤龍太郎教授の御学恩に、心から感謝する。

- (60) IV. ii. 78; V. iii. 170; V. iii. 231, etc.
- (61) Cf. *Æschylus: Plays*, "Agamemnon," tr. G. M. Cookson (London, 1960), ll. 1760-3; "Choephore," ll. 332-4, etc.
- (62) Kenneth Muir, *op. cit.*, pp. lvi, vii.
- (63) Edward Dowden, *op. cit.*, p. 268.
- (64) A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 230.
- (65) G. Wilson Knight, *op. cit.*, p. 194.
- (66) G. I. Duthie, *op. cit.*, pp. xlii, l, 201 (=N. to 3. 2. 59-60).
- (67) A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 23. Cf. Note (7); Bonamy Dobrée, *op. cit.*, p. 334; Richard B. Sewall, *The Vision of Tragedy* (Yale University Press, 1962), pp. 68-79.
- (68) John D. Jump, ed., *Doctor Faustus*: "Christopher Marlowe" (Methuen & Co. Ltd., 1962), XVIII. 123.
- (69) G. Wilson Knight, *op. cit.*, p. 204.
- (70) Mario Praz, "The Ambiguity of Shakespeare," *Shakespearean Essays*, ed. Alwin Thaler and Norman Sanders (The University of Tennessee Press, 1964), p. 185.
- (71) Roland Mushat Frye, *Shakespeare and Christian Doctrine* (Princeton University Press, 1963), p. 119. 尚、二重括弧内の引用文は、Luther, Serm. on the day of Helena's finding of the cross, May 3, 1522, Weimar ed., vol. 10, III, p. 119. 尚、フライの間違ったナイト觀については、cf. Notes (65), (69); G. Wilson Knight, "Shakespeare and Theology: A Private Protest," *Essays in Criticism* (Oxford, 1965), pp. 95-104.
- (72) George Orwell, *Selected Essays* (Penguin Books, 1960), p. 115.
- (73) Mario Praz, *op. cit.*, pp. 184-5.
- (74) Æschylus, "Agamemnon," *op. cit.*, l. 210. cf. *Ibid.*, ll. 195-202; 275-7.
- (75) A. C. Bradley, *op. cit.*, pp. 17-8.

(尚、この拙稿は、1965年1月に提出した修士論文に準拠しつつ、6月の名古屋大学英文学会例会で改めて発表した約2倍の分量のものを取捨圧縮したものである。)